HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	歌人・逗子八郎 / 井上司朗研究 : 新短歌運動と言論統制のはざまで
著者	田中，綾
引用	北海学園大学人文論集(47)：101-103
発行日	2010-11-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

■北海学園人文学会　第１回例会　発表要旨

歌人・逗子八郎／井上司朗研究
── 新短歌運動と言論統制のはざまで

田　中　　綾

井上司朗（一九〇三～九一年）は，戦時下に，情報局第五部第三課長（のち第二部文芸課長）として，文化・芸術政策を担当した人物である。従来の文学史研究では，「短歌報國の指揮者」（渡辺順三），「権力の手先きとして暴威をふるっていた」（中島健蔵）など，戦時言論統制の担当者として取り上げられることが多かった。

しかしながら彼は，旧制第一高等学校文芸部で短歌創作に手を染め，東京帝国大学卒業後は「逗子八郎」の筆名で，新短歌運動の旗手の一人として活動したいわゆる〈文芸エリート〉歌人でもあった。戦時下の一言語表現者，特に「歌人」としては，どのような作品を残してきたのか。

その問いを戦後すぐに発したのは，文学者の戦争責任を問う数編の匿名コラムの一つ，「『歌つくり官僚』逗子八郎」であった（『文學時評』第一二号，一九四六年一〇月）。昭和初年代，定型遵守の既成歌壇に叛旗を翻すかたちで新短歌運動を担った逗子が，戦時下にはその主宰雑誌を解体し，「いつの間にか定型歌人へと漸次に移行した昭和十八年頃までの彼の行動には，ひとつの声明も，半片の宣言も行はれなかつた」こと，また，かつて抵抗した定型の世界に「大先生」として返り咲いた逗子／井上の行為を，歌人たち全体が傍観していたことに「自己反省」を求めるという内容である。これを執筆したのは，戦後の『短歌雑誌　八雲』編集者であった久保田正文であったことが最近明らかになった（小嶋知善編『久保田正文著作選』大正大学出版会，二〇〇九年）が，この内容を検証するには，それまでの新短歌「歌人」としての逗子八郎の作品等を追う必要がある。その，

歌人・逗子八郎をめぐる，多彩な人脈と作品とを掘り起こし，かつ，昭和十年代文学史に新たな視点を加えることが本研究の目的である。

手始めに，旧制第一高等学校時代の井上司朗を検証した。一九二一（大正十）年，井上司朗は一高に入学した。同年入学に，小林秀雄，堀辰雄，樺俊雄らがおり，前年入学には神西清が，翌十一年には深田久彌が入学している。入学早々に伝統ある一高短歌会に入った逗子／井上は，歌会に参加し，また，一高校友會『校友會雑誌』に小説一編と多くの短歌を掲載した。

たとえば，與謝野晶子，與謝野寛夫妻と，一高出身の平野萬里が講師に招かれた折の作品は次のようなものである。

九月例會　九月二十二日　於鉢の木

吾指とダリヤの影と寢てありぬいみじく白き秋の夜の草

與謝野晶子

快く海よりきたる風ありて詩人の髪のうちなびく時

與謝野寛

深川の空の虚（うつろ）に立ちぼる煙の林都會は死なず

平野萬里

思はじと思へど思ふ磯づたひ事々すぎし潮騒の音

水にうつる月たまゆらに亂れつゝ水面をはしる水蟲のかげ

以上二首，井上司朗

『校友會雑誌』二九一号（大正一一・一二・二〇）

のちの非定型の新短歌ではなく，当時は，定型を遵守した短歌創作に打ち込んでいたことがうかがえる。この短歌会に，逗子／井上は深田久彌を誘い，のち美学者となった竹内敏雄とも歌会に出席していた。卒業後，後輩の高見順に，短歌についての評論を書かせたこともあったが，そのような人脈がこの頃に育まれていた。

また，一高短歌会幹事として，逗子／井上は，二年をかけて『現代抒情歌選』の編集にあたった。近代短歌約六千首を，「相聞篇」「親愛篇」「病痾

篇」「挽歌篇」「寂心篇」の五篇に分けて編んだアンソロジーであり，向陵詩社編として一九二五（大正一四）年一月，芳美閣から刊行されたものである。

そのような逗子／井上について，資料は残されているが，これまで詳しい研究はなされてこなかった。たとえば大佛（おさらぎ）次郎，久米正雄，里見弴（とん）を主要メンバーとする文士野球チーム「老童軍」との試合など，昭和の都市青年らしい青春を過ごした資料もある。それら資料整理を中心に，実証的に人脈を掘り起こし，一時期歌壇を二分するほどの勢力のあった新短歌運動を考察する見通しを，中間報告のかたちで発表した。